

れを用ゆべし。一種又丸く皮厚く、實は少くかたきあり、うゆべからず、又一種菩提子ぼだいしとて大きなあり、數珠とす、うゆる地の事、尤も濕氣を好む物なり、何にても糞しを多く用ひ、早せば水をそそぎ、常にうるほひを保つべし、畦作りつねのごとくし、五六寸に一本づ、見合せうへ、厚く土をおほひ、芸り培ひ別法なし、苗長く心葉出るを、節をかけてぬき捨べし、心葉をぬかずして置たるは實少し、九月霜ふりて實を取收め、よく干して米にする事は、蒸し乾し、すりくだき、米のごとくこしらゆるなり、宿根より生るは、から堅く子少し、二三月蒔置て移しうゆべし、實は慧苡仁と云藥種なり、性のよき物なり、病人の食物に調て用ゆべし、粥になり飯に交へ、だんごにした、め、様料理多し、葉を米にませ、飯に調すれば、その香早稻米の飯のごとし、茶を煎するに、葉を少入れば、香よく味もます物なり。

〔菜譜〕下 慧苡 本艸綱目と農政全書を考るに、一種から光ありて薄く、米白して糯米の如く、牙に粘は眞慧苡なり、藥に入れ、粥となし、麪として食す、一種圓してから厚くかたきは、菩提子也、其米少し、即粳糲なり、藥に不用、先實をまきて後、苗四五寸なる時うつしうふべし、水邊尤もよし、毎科相去事一尺、或云、宿根より生ずるはから堅くしてあし、毎年まくべし、子をとるにはよくむして、日にはしからを去べし、農政全書曰、九月霜後收子、至來年三月中、隨耕地於壠内、點種撈蓋令平、有草則鋤、居家必用云、熟耕地相去一尺種、一科不問高下、但肥良地即堪、慧苡葉青きも、乾たるも、茶に加へ煎すれば、香よく味よし、又これを煎じて飯をかしくもよし、性よし、濕痺にもよし、むねをひらき食をす、む、濕氣にあたりてしびる、にもよし。

醫以利用

〔庖厨備用倭名本草二 稷粟〕慧苡仁、味甘、性寒毒ナシ、筋骨拘攣シテ屈伸シガタキニ、久風濕痺ニ用フ、久服スレバ、身ヲ輕クシ氣ヲマシ、筋骨ノ中ノ邪氣ヲ除キ、腸胃ヲ利シ、水腫ヲ消シ、食ヲス、ム、飯ニシ麪ニシテ食スレバ、飢ズ、煮クダシニタキ、センジ用レバ、病ヲ治スル功多シ、脾胃肺ニ益アリ、